

2005～06 年度共同研究を終えて

森 島 覚

共同研究代表者

7 度目となる、追手門学院大学オーストラリア研究所の共同研究「アジア・大洋州諸国の 21 世紀的発展の役割 — 経済自由化と政治的均衡をめぐる諸問題 —」を豪・ニュージーランドの研究者、西オーストラリア大学のデニス・ラムレー、オタゴ大学（現在、UAE のアメリカン大学に出向中）のショーン・ゴールドフィンチと、本年度さらにテーマの分析をより現実味を帯びたものとするためメルボルン大学（シニア・フェロー）のブラハム・ダブスチェックに急遽参加してもらい、本学の山中教授、重松教授、南出教授とわたくし森島の総勢 7 名で行った。

2006 年 12 月 9 日、本研究所にて終日行ったセミナーで共同研究の成果が発表され、相互討論を行い、2 年間の研究の意義と限界を確認しあった。その全ての成果が次頁から始まる共同研究報告である。

さて、今回掲げたテーマに対する総括であるが、40 年近い本研究所の研究スタイルから見ると、大きなテーマであるにもかかわらず学際的に取り組めたことが、画期的であったのではないか。それは、主たる専攻が地理学、歴史学、政治学、経営学、経済学に分かれていながら、各論である個々人のテーマそれぞれに全員が白熱した討論に加わったことからいえる。さらに昨年述べた、「アメリカー極集中の弊害からソフトランディング」するには、日本の役割が鍵であり、その意味でわが国は現在重要な分岐点に置かれていることも再確認できた。

しかしながら、具体的・現実的提言となると余りにも大きな課題や障害が立ちはだかっている。とりわけ、日本国内における国民の世界観・社会観が今日ほど危機に瀕している時期はない、その意味では今後も我々の研鑽をより厳しいものとして続けることが義務付けられている。

最後に、わが国のみならずオーストラリア連邦政府においても合理化・財政の見直しが進展している中、40 年近く学術振興のために予算を認めて頂いている大学当局に感謝するものである。とともに、本年、連邦政府より長年のオーストラリア研究所の活動に対して全面的に評価され感謝されたのも、10 年以上継続してきたオーストラリアの研究者との共同研究がその一端を担ったのではないか（少しばかり自負してもよいのでは）、と思うしだいである。

